

## 上古音研究の問題点と楚簡<sup>1</sup>

野原将揮（早稲田大学大学院・博士課程）

### はじめに

17世紀以降、清朝考証学者によって経典に見える脚韻字の分類や諧声系列の整理が進められ、上古音体系の大きな枠組みが示された。Karlgrenの活躍以降は諧声符の分類だけでなくシナ・チベット語との比較研究が進み、Maspero等によって形態論的研究も盛んに行われるようになった。近年ではPullyblank、Baxter、Sagart、鄭張尚芳、潘悟雲等のいわゆる“新派”と称される研究者によってシナ・チベット祖語再構をも視野に入れた上古音再構が試みられている<sup>2</sup>。その中でもBaxter1992や鄭張尚芳2003等の上古音体系は広く認められていると言って良いだろう。本稿では上古音研究に関わる問題点を簡単に整理し、その解決策の一つとして出土資料を利用した再構例を示したい。

### 1. 問題点

#### 1-1. 音価推定と資料の制約

上古音研究には資料（諧声系列も含む）的制約が有り、大まかな枠組みしか明らかにすることができないという側面がある。制約が有るのは資料の数量についてだけではなく（もちろん資料の数にも制約が有るが）、資料から得られる情報にも制約が有る。たとえば上古の唇音が中古音のように\*p-、\*ph-、\*b-の三項的対立であるという証拠は上古の資料からは見いだせない。したがって上古に於いては\*p-、\*ph-、\*b-、\*bh-という声母体系である可能性も否定は出来ないのである。例として「方」の諧声系列を見てみよう：

表 1. 「方」の諧声系列

幫母/p-/	滂母/ph-/	並母/b-/
方放	芳妨	防房

\*鼻音（明母）と諧声関係を有する例は多くない。

このように両唇破裂音であれば、清濁・気音の有無に拘わらず諧声関係が成り立つ。「芳」の声符が中古幫母の「方」であるからといって、「芳」の上古音価を無気音\*p-と再構することはできない。反対に「方」を\*ph-とすることもできない。したがって通常は中古音の枠組みに従って上古音声母を再構することになる。「方」の上古音価は\*p-と再構され、「芳」は\*ph-と再構される。以上のことは諸文献に見える“通仮”についても同様のことが言えよう。

上古の資料的制約（諧声系列）と音価推定に関しては Handel2010:42-43 が参考になる。

<sup>1</sup> 本稿は早稲田大学中国文学会第39回大会での発表内容に修正を加えたものである。

<sup>2</sup> “新派”については、宮本2001を参照されたい。

## 1-2. 漢語の親族関係

“新派”と称される研究者の多くがシナ・チベット祖語再構という視点から上古音研究を進めており、その成果は広く認められつつある。冒頭でも述べた通り、“新派”と称される研究者には Baxter や Sagart、中国国内では鄭張尚芳や潘悟雲などが挙げられる。細かな差異を除けば、“新派”の再構音は多くの点で一致していると言えよう。ところが漢語の親族関係については“新派”の間でも意見が分かれており、それぞれの見解に注意が必要である。先述したとおり“新派”の研究者はシナ・チベット祖語再構を前提に上古音再構を進めているため、比較対象の言語に違いがあれば、ここから再構された音体系に差異が生じる可能性があるからである<sup>3</sup>。また“新派”は形態論的な議論も含めた上古音再構を進めており、その中でも Sagart1993 の接中辞に関する報告は大変特徴的である。

## 1-3. 対象となる時代・地域

上古音とはいつの時代の音韻体系を研究対象とするのか。研究者によってその定義はやや異なる。多くの研究者が上古音を幾つかの時代に分けて論じているが、当然のことながらこの時代区分についても資料の制約を受けることになる（資料が無ければ時代を区分することさえ不可能であるが）。たとえば鄭張尚芳 2003 は「上古前期」、「上古中期」、「上古後期」の三つの時代に区分する。「上古前期」は殷及び周を含み、甲骨・金文の諧声・仮借を対象とする。「上古中期」は周代を指し、『詩経』等の先秦文献を対象とする。そして「上古後期」は秦漢魏を指し、秦漢魏の文献及び梵漢資料等を研究対象とするとしている。また Starostin1989 は上古を六つの時代に区分し、上古音の下限を 5 世紀までとしており特徴的である。

対象となる時代がそれぞれ異なるように、対象とする地域についてもあまり明確にされてはいない。この点に関しても、資料の制約を受けるためやむを得ないだろう。

## 1-4. 「復元の強度」

段玉裁によって「同諧声者必同部也」と提唱されて以降、上古音研究において諧声系列の分類は最も基礎的な研究とされる。ところがすべての文字が諧声関係を有しているわけではなく、諧声関係を有しない文字も少なくない。たとえば「田」は中古定母に読まれるが、「田」が声符となる文字は一様に中古定母に読まれ、再構の手がかりが少ないと言わざるを得ない<sup>4</sup>。このような文字について、諧声系列から上古音価を再構することは難しく、中古の音韻地位から推して再構するにとどまる例が多い。

平田 2010:64 によって「復元の強度」という概念が示されている：

<sup>3</sup> 潘悟雲 1997:11 もその点を意識していると思われる箇所が見られる：“（「鳥」を例に影母を\*qa と再構する箇所）很多西方学者并不认为侗台语与汉语有亲缘关系，上面所做的比较也许还不足以说明汉语“鸟”的原始形式是\*qa”として、チベット・ビルマ諸語に見える「鳥」の例を挙げて更なる検証を加えている。

<sup>4</sup> 「佃」「甸」等が見られるが、いずれも中古定母である。

“水”のような文字の字音について上古音を復元するのは困難である。Minimal Old Chinese という着想が提出されているが (Schuessler2009)、むしろ個別の字音の復元自体の「強度」を、確かめることも必要である。字音の正確な復元の試み自体を放棄せねばならない場合もあることは認めておくべきだろう。

「田」についても「復元の強度」の低い文字と言えるかもしれない。このような復元強度の低い文字については文字ごとの精緻な分析が必要となるが、「水」のように全く手がかりの無い文字について、どのように再構を進めていくべきであろうか。

## 2. 出土資料の利点と問題点

### 2-1. 対象とする時代・地域

出土資料の利点の一つは資料に見える言語の時代や地域を限定して論じることが可能となる点だろう。たとえば『荊門市郭店楚墓竹簡』に収録される竹簡（以下『郭店楚簡』）はおおよそ紀元前 300 年頃の楚地の言語を反映していると予想される<sup>5</sup>。楚簡のような時代・地域を限定できる出土資料を扱うことでより精密な上古音体系を再構できる。また楚簡のような資料は上古から中古という広い範囲の中にひとつの定点を与えるものであり、音変化を考察する上でも大変重要な資料である。

### 2-2. 新しい通仮例

出土資料の魅力は時代・地域を限定して議論できることだけではない。出土資料中には伝世文献では見られないような言語現象（通仮等）が見られることも利点の一つである。たとえば上古音体系に無声鼻音を再構することはすでに定説となっているが、細部については研究者間で意見の違いが見られる。たとえば「難」「攤」「漢」の諧声関係である。中古泥母「難」は中古透母「攤」と中古曉母「漢」と諧声関係を有しているが、李方桂 1971 では泥母と透母の諧声関係を認め \*hn->th- という音変化を推定するのみで、泥母と曉母の諧声関係は認めない<sup>6</sup>。ところが近年楚簡中で「𣪠」（水と難に作る）という字が「漢水」を表すという例が見られ、これによって「漢」が鼻音 \*n- に由来するということがほぼ確実となったと言えよう<sup>7</sup>。鄭張尚芳 2003 は透母へ変化するものを無声鼻音 (\*nh-[ŋ]) とし、曉母へと変化する鼻音には \*hn- の複声母としており、「難」「漢」「攤」の諧声関係を説明することが可能である。このような体系が類型論的に支持されるかについてはやや疑問が残るが、上記の諧声現象を説明するためには何らかの処置を加えなければならないだろう。ひとつの可能性として方言差あるいは時代差が考えられるが、現在のところそれを証するだけの

<sup>5</sup> 馮勝君 2007 等は『上博楚簡』に見える文字の字体から齊系との関係を指摘する。

<sup>6</sup> Baxter1992 も同様である。

<sup>7</sup> 『上博楚簡』「孔子詩論」10 号簡等。

論拠に乏しい。

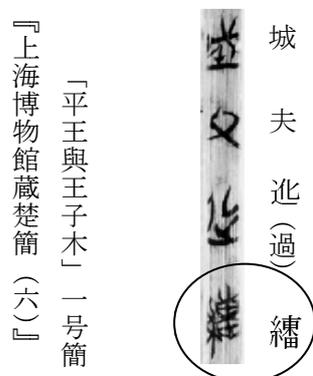
### 2-3. 課題

出土資料を利用することで明らかにできることは多いが、そうではない点も挙げられる。たとえば出土資料は実際に出土したものであるから、当然出土地点に偏りがあり、竹簡などは楚地で多く出土しているものの他地域ではそれほど多く出土していない。楚簡を用いた研究成果を上古音体系全体に反映することが可能か否かについて検討を加える必要がある<sup>8</sup>。

また楚地というと非漢語系の言語との関連も考えなければならない。楚地の言語構造については大西克也 1996:121-129 に見られるように楚地では漢語が上層語 (superstratum) であると考えられるが、他言語による影響も少なからず有るだろう<sup>9</sup>。大西克也 1996:122 では出土資料を上古の方言研究資料と位置づけるための条件を挙げており参考になる。

### 3. 再構例

以下で楚簡を用いた再構例を提示したい。上述したように「田」は「佃」「甸」と諧声関係を有しているが、いずれも中古定母であるから上古音価を推定するには中古の音韻地位から \*din と推定するのが一般的な手法である。しかし『上博楚簡(六)』「平王與王子木」にこの「田」を声符に持つと思われる字が現れる：



「繡」は「糸」、「東」に従う字で「田」が声符であると考えられる。「繡」はここでは「申」に通仮する。「申」は諧声系列を見てみると、中古以母「棘」と諧声関係にあることから L-type に所属すると考えられる。戦国楚簡では T-type と L-type の文字は通仮しないことから、「田」も \*din ではなく \*lin と再構すべきだろう。このように「田」は諧声系列から

<sup>8</sup> 2010年7月の17th meeting of the Linguistic Circle for the Study of Eastern Eurasian Languageにて Zev Handel 氏から楚簡に反映する音体系と上古音体系を分けて考える可能性について貴重なご助言をいただいた。

<sup>9</sup> 林ほか 2003 等を参照されたい。大西 1996:121-129 では楚地の語法が東方地域の語法と一致する点が確認されること、基礎語彙に関しては中原地域の語彙と一致することが指摘されている。

だけでは\*din と再構せざるを得ないが、楚簡に見える通仮例を整理することによって\*lin と再構することができる<sup>10</sup>。このように出土資料を扱うことで再構の精度を高めることが可能となる。

## おわりに

以上、上古音研究に伴う問題点を挙げ、楚簡を利用した上古音再構の一例を提示した。出土資料から明らかになる点が多いが、そうでない点も少なくない。上古の資料や諧声系列と同様に出土資料に見える通仮にも制約が有り音価推定が困難な場合が多い。その場合、中古音の枠組みから音価推定するか或いは親族関係にある言語との比較が必要となるだろう。漢語の系統関係については Karlgren1933 や服部四郎『日本語の系統』で指摘されるように単語家族の研究が不可欠であり、その単語家族の研究を進めるためには漢語内部の情報を中心にして上古音体系の再構を進めることが必要であると考えられる。

## 《参照文献》

### 【日本語】

- 林虹瑛 村瀬望 古屋昭弘 2004. 「戦国文字「罷」について」, 『開篇』23:71-75 頁。東京：好文出版。
- 服部四郎 1999. 『日本語の系統』。岩波書店。
- 平田昌司 2010. 「“水”の字音から」, 『日本中国語学会第 60 回全国大会』: 62-65 頁。
- 宮本徹 2001. 「上古漢語の\*r,\*l について」, 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』4:1-21 頁。
- 大西克也 1996. 「楚の言語について——戦国楚簡を中心に——」, 『日中文化研究』10:121-129 頁。東京：勉誠社。

### 【中国語】

- 馮勝君 2007. 『郭店簡與上博簡對比研究』。綫装書局。
- 李方桂 1971. 「上古音研究」, 『清華學報』1, 2: 1-61 頁。
- 馬承源主編 2001~2008. 『上海博物館藏戰國楚竹書（一）～（七）』。上海:上海古籍出版社。
- 潘悟云 1997. 「喉音考」, 『民族語文』5:10-24 頁。
- 荆門市博物館編 1998. 『郭店楚墓竹簡』。北京：文物出版社。
- 鄭張尚方 2003. 『上古音系』。上海：上海教育出版社。

### 【欧文】

---

<sup>10</sup> 『古字通仮会典』p.85 には「田」と「𦵑」の通仮が挙げられており、楚簡で「𦵑」が「申」を表すことから「田」と「申」を声符に持つ字は同音或いは類音であったと予想される。また Bodman1980:99 はチベット文語との比較等から「田」を\*lins と推定している。

- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Bodman, Nicholas C. 1980. Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of the Relationship. In Frans Van Coetsem and Linda R. Waugh (eds.), *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: E. J. Brill. 34-199.
- Karlgren, B. 1933 Word Families in Chinese. *Bulletin of the Museum of Far Easter Antiquities* 5:9-120.
- Handel, Z. 2010. Old Chinese and Min. *Bulletin of Chinese Linguistics Society of Japan* 257:34-68.
- Sagart, L. 1993. Chinese and Austronesian: evidence for a genetic relationship. *Journal of Chinese Linguistics* 21-1:1-63.
- Sagart, L. and Baxter, William H. 2009. Reconstructing Old Chinese uvulars in the Baxter-Sagart system (Version 0.99). *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 38-2:221-244.
- СТАРОСТИН, С. А. 1989. *РЕКОНСТРУКЦИЯ ДРЕВНЕКИТАЙСКОЙ ФОНОЛОГИЧЕСКОЙ СИСТЕМЫ*. : НАУКА. Главная редакция восточной литературы.